
浅き夢みし君と

幸村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浅き夢みし君と

【Nコード】

N13940

【作者名】

幸村

【あらすじ】

夢の中で出会った少女。
突然その子は現実に現れる。
なんと、少女は自分の子供だ言う

少女との出会いから大きな運命を決める生活へ変貌する。

未来と今の入り乱れる恋愛ファンタジー

夢逸話

気が付くとそこには誰も居なかった。

大きな木下で泣き続ける小さな女の子

「どうかしたの？」

問うとこちらを見上げ真っ直ぐな瞳で見つめてきた。

そこで、目が覚めた。

ベッドの上ではちりと眼を開ける

「ふう……」

ここ最近同じ夢で眼を覚ます事が多い

毎日ほどではないが二日に一回は先程の夢で起きる。

一体なんの夢なのかさっぱりだが、考えても答えは出ないので考えることはしない。

「あ、今日から冬休みか」

間抜けな欠伸をしながらぼんやりする俺、龍ヶ峰 貢

高校一年で、現在独り暮らしである。

ふと、携帯をみると不在着信があることに気が付いた

「あ、有希からだ」

有希とは藤守 有希という俺の同級生である

印象としては少々元気が良すぎるが幼馴染みの俺から見てもきつと美人の部類に入るだろう。

そんな彼女に掛け直すと

ぷるる……

『おつそーい！！なにしてたのよ！！』
大声で話す彼女は小学校からの馴染みで、今となっては腐れ縁と言っても良いだろう。

「ごめん、寝てた」

『ったく、今日から冬休みだし鍋でもやるために買い物行こう言っただじゃない』

「ごめん、最近寝不足で」

「また、あの夢？物好きも居たものね、貢なんかの夢に毎度毎度出るなんて」

彼女は俺の夢を知っている

随分と前に相談したことからの付き合いでもある。

こんな夢の話は普通気にするなどと言って流すのだが彼女だけは親身になって相談に乗ってくれた。

因みに彼女は何故かこの話題を出すと途端に不機嫌になる。

だからこそ普段はこの会話をする事は無いのだが、ついすっかりと俺は

有希に話を振ってしまった。

『貢は夢中でいちゃつくので大変そうだし、私一人で買い物いくわ』

「いや、俺も行くよ幾らなんでも女の子に食材の買い出し一人に行かせる訳にはいかないし」

『な、中々殊勝な考えじゃない！そしたら1時に噴水広場前に集合ね』

「わかった、何か持っていくものはある？」

『とくには無いわね』

それだけ話して俺は携帯を切る。

着替えて早々に出掛ける

今の時間は12時

噴水広場間で急げば30分で着く筈だ。

理由は分からないが最後の電話では有希は機嫌が良かった。
ここで遅刻しようものならまた不機嫌になってしまう。

時折走っては歩きの繰り返ししていると約束の場所に着いた
しかし、そこにはまだ有希の姿はない。

「珍しいな、有希が俺より遅いなんて
すると後ろから足音がする

「ごめん待たしちゃった」

「いや、今来たばかりだからー」
息を吞んでしまった。

いつもの有希ではなく、なんと言おうか・・・ものすごく
女の子らしい服装だったのだ。

ブラウンで袖先には可愛らしい白いふわふわとしたアクセサリーが
あしらっていた。

「何よ、そんなジロジロ見ないでよ」

恥ずかしそうに身をよじる

モジ、モジモジ・・・

始めてみたら体調悪いの？って勘違いしてしまうがこれは有希の癖
だった。

「あ、ごめん・・・すぎゅ似合ってる」

あ、噛んだ。

それにポカンとしてた有希は吹き出して笑った。

「あつはは、何今の!!」

「うるさいな」

照れ隠しにそっぽを向くが無意味だった。

間違いなく俺は今、顔を真っ赤にしている。
ニヤニヤと笑いながらこちらを見る有希に気恥ずかしい感覚に襲われ逃げる様に歩き出した。

少し歩くとそこには小さな商店街だった。

子供の頃からの馴染みで今では各店の人達から名前で呼ばれる程度には知られている。

有希が具材を買うために行き着けの店に入る。

去年出来たばかりの店で、綺麗な上に品数も豊富な方だ。
特に思い入れは無いのだが有希と二人で愛用していた。

食材を見るからにキムチ鍋と言ったところだろう

「そういえばこのお店【ヨーフィマート】出店の5年置きに記念メダルを開店日に来店者に全員プレゼントらしいよ」

そういえば有希は昔からこういった記念物に弱い

「きつと有希の事だから回転記念メダルとか・・・」

「とーぜん！ゲットしたよ！！」

携帯のストラップサイズの小さな金のメダルだった

一円玉を少し小さくしたような物だ。

桜の花びらが小さく拵えられていて以外にデザインは良いようだ。

そして【2009年記念】

だが、何の意味が・・・。

それに5年置きって、毎年数字が半端だろうに。

「ヨカッタネ」

「なに〜！？何かバカにしてない！？」

「ソナナコトナイヨ」

そんなことをしていると視界の隅で何かが動いた気がした
ふと目をやるとそこには小さな女の子。

こちらを潤んだ瞳で見つめてくる。

迷子にでもなつて寂しいのだろうか、俺はしゃがみこんで目線を同じにして声をかけた。

「どうかしたの？家族は？」

問いかけにふるふると顔を振って否定。

迷子ではない？

でも周りを見るからにこの子の親と思わしき人はいない。
というか俺と有希しかない。

しかし、俺の袖をしつかりとつかんだまま離さない。

「何、この子知り合い？」

「いや、それが知らない子供なんー」

言いかけてハツとした。

この子の目……。

どこかで

「それにしても、貢は子供に縁があるね」

「え」

そうだ、この子

俺の夢に出てきて……

いやいや、有り得ないだろう

夢で見た子供が現実に出てきたなんて

するとこの子はあるとかしゃがんだ俺の腕に抱き付いて
「ばば」

と言ったのだ（「ー」）

いや、なんだ今の顔

現実逃避してる場合じゃない。

「ぱばって誰の事だ」

俺を見るその目は間違いなく両親に訴えかける目だった。

「へえ、貢くんそんな小さな子供が居たんだ」お母さんは誰かなあ
「」

ちよ、有希さん

目が怖いです。

少女は有希の言葉に反応して

「まま」

そう言つて有希のスカートの裾を掴む。

構図としては子供に喧嘩を仲裁される夫婦の図。

唯一の問題は俺たちがどう見ても未成年にしか見えないってことで
更に言えば先程言つたようにこの辺りは行き着けの店で回りは知り
合いだらけで・・・

レジの伊藤さんがこちらを見ながら

親指をたててニツと笑う Σd(。皿)

その全てを理解した顔を止めてくれませんか。

「ちよ、ままままままままま、ままま」

混乱気味到有希は顔を真っ赤にする。

「とりあえずここの店員さんに言つて任せよう」

そう言つて離れようとした途端

少女が泣き出した。

周りからの冷たい視線に困り果ててしまうと有希は冷静になったのか
近くにいた店員にメモらしい物を渡していた。

「一旦この子を貢の家に連れていくわよ」

「え」

誘拐ですか有希さん

誘拐とアブナイお薬は20を過ぎてから・・・も駄目か

なんて混乱してると

「今、そこにいた店員に連絡先を渡しておいたから両親が来たら連絡が来るはず

それにこのまま放っておくわけには行かないでしょう」
さすが、頭の回転が速い。

とりあえず俺は少女を背中に抱える

「あ、ねえ、君の名前は何て言うのかな？」

「みゆ!」

その子の言葉は何かの鳴き声のように有希は首をかしげた。

「みゆ?・・・ああ、未夢ちゃんね」

改めて名前で呼ばれると嬉しそうに笑った。

「とりあえずこの子にご飯をあげよう」

さつきから背中越しに、ぐうー、と喋ってなりやまない。

家に着くなり未夢は眠ってしまった。

疲れていたのだろう。

俺の布団のなかで眠る姿は本当に無邪気そのものだった。

今の時間は夕方5時過ぎ

親もそろそろ探しに動いている筈だ

しかし一向に携帯が鳴る様子もない。

キッチンから美味しそうな香りが流れてくる。

「ふふ」

鼻歌混じりにリズムカルな包丁が野菜を切る音が聞こえる。

随分と機嫌が良いんだな。

「ほら、出来たよーって寝てるんじゃ可愛そうかなあ」
有希は鍋をコンロ上に置いて食卓の準備をする。

すると、匂いに釣られてか未夢が目を覚ます。

「んっっ・・・ごはん」

「あ、起きた」

「ごはんだよーお鍋だから沢山あるからね」

そう言つて小皿に盛つてポン酢をかけるといった非常にシンプルな食べ方だったがお気に召したようで未夢はせかせかと席についた。

ちなみにキムチは小さい子供がいるので次回へ持ち越し

「いただきます」

「いただきます」

「まっす」

順番で有希・俺・未夢の三人

ちなみに何故俺が有希のご飯にありついているかと言うと俺に両親は幼い頃に他界し、この世にはおらず、独り暮らしの俺と有希の家は隣同士であり幼馴染みという事もあり

時たまこうやってご飯のご馳走になるわけだ。

「ほんとにありがとうな」

「な、なに？いきなり」

「有希がやってくれてなけりゃ俺、途方に暮れてた」

今日の事態に対応できたのは全て有希のお陰だ。

この子に泣きつかれてたら

俺も一緒になつて泣いてしまふところだった。

「気にしないでよ、昔からの付き合いでしょーーそれより」
チラツと時計を見る
気づけば8時を回っていた。

遅い
そろそろこの子の親も個々の場所に来る筈だ
なのに・・・

「未夢」
名前を呼ばれるとこちらを見つめて返してくる。
「未夢のお母さんは？お父さんでもいい」
「ちよつと、貢」
有希も同じ考えに至ったのか俺を止めようとする
まさかとは思うが

先程までの笑顔は消え俯く。
微かに胸が痛む

でも、確認しなくては・・・。

「ぱぱと、ママはいないよ」
涙声の未夢は涙ながらに答える。

やはり
おかしいと思ったのだ。
いくら冬休みとはいえ俺達のいた店は子供が一人居ても楽しい場所
ではない。
しかも時間帯は1時過ぎ
普通ならば家で昼食だ
極めつけには20時過ぎても親からの連絡がない。

「この子・・・孤児だ。」

「でも、でも今はぱとママ居るもん」

途端に笑顔になってこちらを見る

その目線は明らかに親を見る子の瞳だった。

「でも、なんで未夢はあの店に？」

「もう良いじゃない・・・辛いことは思い出させちゃ可哀想よ」
そういわれハツとする

俺は自分の行った行為に気が付いた。

小さな子供の心に出来た傷を抉るような事をしてしまった。

「あのお店はぱとママの思いでのお店だっていった」

思い出？

あの店は開店して一年しかたってない

この子の両親はあの店に関係ある人なのだろうか。

すると、未夢はごそごそと洋服の下からストラップを取り出す。

「ぱとママの思い出」

そう言って手渡されたのはメダル

それは昼間に話題に上がったヨーフィマートの記念メダルだった。

「これがあれば子の両親がわかるかも！」

有希が声をあげる

「でも、この子の両親はー」

「わかってるわよ、でも親がわかればこの子を預かってた親戚とか
分かるかもしれないでしょ？」

それにこのメダルは凝ってて、予約すれば年号の下に名前を入れて
くれるんだ」

そもそも予約するようなミィハーな人が居るのか。

ああ、有希だ

そういえば昼に見せて貰ったメダルにも有希と書かれてたな。
しかし、実際予約していれば連絡先は残ってるだろう。
有希はメダルを受け取り裏側を見た

すると、有希はすこしポカンとして

「なにこれ」

「？」

彼女は俺にメダルを見せてきた
名前も書いてある

貢・有希

名前が俺たちだった。

さらに年号は2014年。

生産のミスか？

ある意味こういったのはレアで欲しがるかもしれない。

しかし、名前がこうも・・・偶然はあり得るのだろうか。

同姓同名って可能性もあるが未夢が偶然声をかけてその相手が偶然
両親と同じ名前・・・

しかも今日買いい物に出掛けるのだって偶然だ。

謎は深まるばかりで解ける気配はない。

「と、とりあえず」

俺は営業時間ギリギリのヨーフィマートに連絡したが一回も搜索願
いらしい電話は一回もかかってきてないらしい

どうしたものか・・・

とりあえず親が見つかるまで未夢との共同生活だ
それとも孤児院か？

いや、この子の事も知らず放り投げ出すのはあまりにも無責任だ。

俺も孤児院に入れられると聞かされるとき恐ろしく不安だったのを覚えている。

可能ならばこの子にはそんな不安を感じさせたくはなかった。

「未夢」

名前を呼ぶと改めて振り返ってニコニコする。

「なに？ ぱぱ」

「未夢は・・・俺と、パパと一緒に暮らしたいか？」
その質問に未夢はペアッと明るくなる

「うん！！」

ピョンピョンとはねて喜ぶ

わざわざ隣まで駆け寄ってきて抱き付いてきた。

「貢？ いいの？」

有希は不思議そうに問いかけてくる。

「しょうがないさ、この子を今さら放っておくわけには行かないしね」

俺の言葉に何やら満足げな有希

しかし、本当に問題なのはこれからだ

今は冬休みな訳だが数日もすれば学校は再開されこの事態が学校でバレル。

可能なら冬休み中に解決して欲しいものだ。

俺は一抹の不安を隠せず溜め息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1394o/>

浅き夢みし君と

2010年10月9日23時21分発行